

### **P-29** 触覚を用いたリスクコミュニケーション・ゲームの開発と試行

○<sup>もりやま</sup>守山 <sup>まさき</sup>正樹<sup>1</sup>, 鎌田 幹夫<sup>2</sup>, 岩井 梢<sup>3</sup>

<sup>1</sup>福岡大学, <sup>2</sup>株式会社 ACORDO, <sup>3</sup>NPO法人ウェルビーイング

**【目的】**現代では生活が便利になる一方、生活リスクも増え、リスクコミュニケーション(RC)が重要になっているが、現行のRCは知識提供に留まる場合が多い。リスクに満ちた世界を生き抜くために、認識や意識へも働きかけが必要だが、有効な方法は少ない。本研究では食のリスクを取り上げ、触覚からの働きかけ方法を報告する。

#### **【対象と方法】**

1. 開発 (1)触知ピース;墨字も点字も使わず、特別な練習なしに、手指の触覚を介して、誰でもが、食に関するリスクをイメージ化し、イメージを操作して、リスクの認識を表現・伝達できるよう、主要なリスクに対応した触知ピースの開発を試み、7個のピースを試作した。(2)座標軸;触知ピースを一行に並べ、リスクへの主観的な判断を外化/表現できる座標軸、及び思考手順を試作した。

2. 試行 2009年11月から2011年1月の間、北九州と東京の視覚障がい者12名、福岡の晴眼者16名の協力を得て、「触知ピース、座標軸、思考手順を用いるワークショップ(WS)」を行った。各WSは参加者4名が机を囲み、アイマスク下で、買い物を行う場面を想起し、商品(紅茶)購入の際に、どのようなリスクに配慮するかを考える、との設定を用いた。

**【結果】**WS7回中、3回は参加者全員が視覚障がい者、4回は全員が晴眼者であった。各WS中は、視覚の状態に関わらず視覚は用いず、触覚だけで作業を行った。WS中は全ての対話を記録した。WSの観察と対話記録の分析から、視覚障がいの有無に関わらず、対象者は全員が全員WSに参加し、触知マップを完成させ、マップを介して他の参加者とリスクについて意見交換を行えた、と判断される。

**【結論】**対象者28名全員が能動的にWSに参加しコミュニケーションが行えた事実から、本方法は、視覚障がいの有無に関わらず、食のリスクを共に考え、交流するRCの方法として、有効性が高い、と結論される。